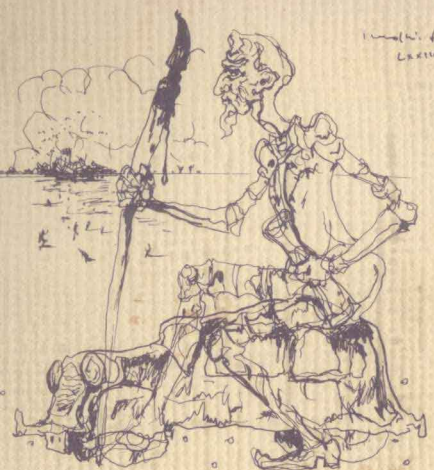


新放浪講座

きだみのる



日本交通公社刊

新放浪講座

きだ
みのる

新放浪講座

きだみのる著

昭和五十年二月十日発行

発行所 東京都千代田区神田鍛冶町三十三 大木ビル

日本交通公社出版事業局

発行者 松田 清

〒一〇一 電話〇三〇二五六〇三四八一

振替東京二九四〇三 送料実費共一六〇円

印刷 交通印刷 製本 交通製本

定価一五〇〇円

目次

第一章	美しいものには倦きねばならぬ	7
第二章	料理の自由をわれらに！	19
第三章	集中食こそ美食の真髄	29
第四章	移動の自由をわれらに！	41
第五章	梅干と連合赤軍	51
第六章	沈黙と自由と独立と	63
第七章	生と恋と死のための遁走	75
第八章	気違い部落よ、さようなら	85
第九章	陸前の秘酒とニジマス組	95
第十章	紳さまも進歩も保守も飯のタネ	105
第十一章	カップ×ガラッパ空談義	115
第十二章	FURICHIN男の自由	127

第十三章	海・花・釣り——そしてミミくん
第十四章	古代ギリシャからの一宿一飯の論理
第十五章	論争にならぬ食物とイデオロ
第十六章	金が仇の世の中だわな
第十七章	パラダイスは存在するか
第十八章	永遠なるもの “部落の四戒”
第十九章	精神の餌——それは旅
第二十章	津軽・海峽の町からの便り
第二十一章	エスさまが召し上る魚は？
第二十二章	人生、失敗したときには
第二十三章	性に従うこれ道、天に従うこれ命
第二十四章	幸福に暮すための四原則

装幀・画
古沢岩美

新放浪講座

第一章　美しいものには倦きねばならぬ

われら美味を漁ることを人生の目的とする同類野郎三匹、何時如何なる星の下で避コウし、このような盟約を結ぶことに相なったのか簡単に語っておかねばならない。何しろ日本は狭いと申しても広大で、ご承知の通り、知らない人間の方がずっと多うござんすのでね。

先ず組上に登場するのは九州は柳川の産の檀一雄旦那。南氷洋捕鯨では、この文章の筆者である私より一年先輩。従って鯨の尾の身のさし身、マグロのトロにも引けを取らないというこのサシミと、肝ぞうの焼き肉の味わいは小生より一年前に味わっている先輩である。

そもその話、北原白秋と同郷の檀旦那がマルハの捕鯨母船に乗り込んだのは、彼の酒癖を癒すためでござったのだが、母船は難破でもない限り酒なんぞに不自由するようなどころではない。

彼は毎日サントリーの角を抱いて、オフィサー食堂で暮したと言われる。

成るほど、成るほど、と私は考えた。

そもそも、人間は倦きることを知っている動物だし、例えば酒を止めるにしても二つの方策があることは争われない。一つの方法は克己心を発揚して、酒への慾求を圧殺するストア的方法、これは意志薄弱のわれら文士には実現の可能性はない。むしろ慾求に従って朝から晩まで酒浸りになって酒に倦き、倦きたところで止めたら好い。少なくとも理屈ではそうなる。

檀旦那の乗った母船に配属された捕鯨監督官は次の年私の乗った日水の母船、凶南丸に配属され、この旦那の飲みっ振りを小生に語ってくれたが、この飲みっ振りはやがて小生自身が驚きを以て経験することになるので、この監督官の話は次の言葉だけ、ここに記しておこう。

「かの君は飲み仲間や女がいなければ酒量が減ってくると思ってござったようですが、そんなことはないですよ。われわれの酒量のはかの先生の飲みっ振りに煽られて倍加しましたもんなあ」

彼と徹底的に飲んだのは、共同通信が企画した「宇宙時代来る」の鼎談会で、東大の茅総長と白髪のの美しかった国文学の亀井勝一郎、それに部落至上主義者の小生。小生の体の条件は悪かった。サツマの長崎鼻から、お天気次第では樺太の南端が見える稚内わっかいまでの一ヶ月の旅行から帰ると鼻血が止まらずに弱っていた。が、やっと鼎談会の日の朝になって一応治った。私は鼻血の再発を怖れて、体をいたわりながら東京に出た。

会で他の二人が科学者と国文学者の立場から何を言ったか忘れたが、私は部落の生活者の立場か



ら、宇宙時代来ると言ったって、部落人とは関係のないことで、これはジャーナリズムのオーバーな表現であると主張した。新聞も読まず、テレビも置いてない山家に住む単純生活者の意見だった。会が終わったとき亀井君と私は安吾夫人のクラクラに行った。亀井君は途中で「きだみのるの功績は論壇に『農村部落』の観念を持ち込んだことだ」と言った。私は「変だなあ。古代ギリシャ社会の研究を志しているのが部落を論壇に持ち込んだなんて。君たち国文学の連中がやるべき仕事だのにね」と答えたりした。

そしてこの夜、私は檀ムツゴロー伯の驚嘆すべき飲みっ振りに立ち合うことになったのである。クラクラに入ると、忽ち檀ムツゴロー伯は酒杯を持ったまま立ち上り、「ヤアヤア珍しや、きだみのる隼人も現われたか。今夜は徹底的に飲もう」

当時私は子供の病気に悩んでいる二人の文人を知っていた。一人は熊本県下の勤皇殿さまの末である菊地重三郎君。彼は何回か私を気遣い部落に訪ねてくれた。この不幸な父親の長男は脊椎中の脊椎液が溜り過ぎて、脳を圧迫し、苦悶するので、その度に医者に脊椎液を抜いてもらわねばならないのだ。この病のため息子の知能の発達も遅れているということだった。この息子は成人になる前に死んだ。

も一人は檀君だった。

ひと頃、檀君の酒と彼の息子の病とは無関係でないと私は思ったものだ。

さてその夜、クラクラを出ると銀座二丁目にある柳川の酒蔵有薫^{うっくん}。ここにはムツゴローの干物がある。これは不知火海の特産物で、檀ムツゴロー伯は、彼の日々の酒路歷程では少なくとも一度はこの奇怪な姿の干物で郷里の酒を酌まずにはいられないし、同行の友人にも同じ肴で同じ酒をすすめずにはいない。

「この酒、飲めるよね。いやうまいよね。ムツゴローだってうまいよね」と口をすぼめて申される。

これに反対したって始まらない。友人だもんなあ。友人なら友人の言葉に賛成するのが天下の定法である。

さてそこから何処に行ったか。上野でも、女の子の多いバーだったようだし、浅草にも行き、同じ女の子が多かった。それから新宿に、そしてあれは何処だったかな。当時のムツゴロー伯の酒は東京中を走りまわる酒だったので場所は定かでないのだが、忽然として一幻想に取りつかれる。「ぼくは偉大な発見をしたんだよ。偉大な発見をね。南水洋に可憐なる女を連れて行く方法をね。簡単だよ。あそこが完全な女性をね。トランクに入れて。そしてキャビンの戸棚、あれは大きいキャビネットだよ。可憐なる女性が窒息してしまわないうちに、大急ぎで部屋に担ぎ込んで、キャビネットの中に隠しちまえば好いんだよね」

私、気違い部落の住民でさえこの計画が有効に実現されるとは信じなかったが、しかし彼氏、南水洋の酒に女性が欠けていたことが身にしみてコタえていたことはこの発明でも解る。そして彼は

つけ加える。

「女さえ連れ込めば鼻血が出ることはないもんなあ」

そう言えば私の鼻血も同系のものだったに違いない。もう止っていた。女たちを擁して酒を呑んでいるうちに。

檀ムツゴロー伯は抜群の伝統的酒客だ。むかし東洋経済研究所に和氣律次郎なる人物が居り申した。ある日私が訪ねると、彼は窓際で本をひもときながら懸命に団扇うちやを使っていた。暑い時期だったので涼を入れているのだと思ったが煽ぐ向が違っていた。風を送る方向をみると窓の外にヒラメが吊り下っていた。この酒客は朝、魚屋の持つて来たヒラメを買い塩水に浸して、いま夕方の酒の肴を作っている最中だったのだ。彼は本を読みながら集まってくる家ばい、金ばい、肉ばいを、追っ払っているところだった。

この酒仙はアテネ فرانセで始めた文化人無料学生の一人で、辻潤と合わせて仏語を大成した二人のうちの一人だ。

和氣律次郎もムツゴロー伯と同様少食で、小皿に幾つもの酒の肴を器用に作っていた。

そうだ。書き落していた。ムツゴロー旦那ときだ旦那との間には、南氷洋捕鯨行の外にも一つ共通点があった。宿無しという共通点だ。きだ旦那は仕事部屋を提供してくれた劇団から立退きを追われ、日本中を転々としているし、ムツゴロー伯は子供たちが家に友人を引き入れ、居間が無くな

り、「おれはどうしたら好いんだ」と問い返したら、「好きな国で暮したら好いじゃあない。ここにあなたの部屋はもう無いのだから」と言われた結果だ。ひどい時代になったもんだ。

開高健旦那は釣の宗匠。関西は阪神辺りの産。

何時か何処かの出版会社のパーティで開高宗匠は夫人の牧羊子と一緒に来たのだろうが、夫人をおっぼってあちこちの卓に並んだ御馳走をついばんでいた。夫人はぼつねんとしていた。迂生が近づくと彼女も近づいて来た。彼女も歩み寄り、そして申された。

「開高はこれから女性探險をはじめ、と申しておるのでございますよ。ほんとうに女性の間に相違があるものでございますか」

きだ旦那は答えた。

「若干の相違はありましような。しかしこのような宣言をした亭主に対するあなたの返事は定つると思えますがね」

「どんな？」

「わたしも男性研究をはじめのわ、ですよ。そうでしょうが」

私の胸の中でジブラルタルに^{むか}対い合ったスペイン領アフリカの娼家の娘が、私のを掌にのせて言った言葉を思い出していた。「大き過ぎず小さ過ぎず……」

こんな話をしているところに遅い体つきに育った開高健^{たけ}の命が、手に血の滴るオープンサンド

